

令和7年度 昭和館作文コンクール審査結果

No	受賞	作品番号	氏名	学校名・学年
1	厚生労働大臣賞	316	岡本 宗士	長与町立長与中学校・2年(長崎県)
2	昭和館館長賞	357	新保 萌々子	光塩女子学院中等科・3年(東京都)
3	優秀賞 1	335	吉田 寛和	神戸市立小部中学校・3年
4	優秀賞 2	352	若狭 早	愛媛大学教育学部附属小学校・2年
5	優秀賞 3	266	曾根 佑哉	板橋区立志村坂下小学校・6年
6	優秀賞 4	177	斎藤 紗奈	板橋区立志村坂下小学校・6年
7	優秀賞 5	341	小野寺 陸	千代田区立お茶の水小学校・5年
8	優秀賞 6	62	國吉 恵美子	関西創価中学校・1年(大阪府)
9	優秀賞 7	351	佐々木 俊輔	立教新座中学校・2年(埼玉県)
10	優秀賞 8	35	西脇 妙美	関西創価中学校・1年(大阪府)

あの日が近くなった日

長与町立長与中学校 2年

岡本 宗士

僕は、原爆の被爆地である長崎に住んでいます。だから小さいころから平和について学ぶ機会が多く、学校の授業や原爆資料館、平和祈念公園などで過去の戦争についての知識を重ねてきました。しかし、当時の人がどんな気持ちで日々を過ごしていたのかを想像することは難しく、いつも自分の生活から遠い世界の出来事のように思っていました。

そんな僕の考えが大きく揺さぶられたのは、中学2年生になり、昭和館のオーラルヒストリーを見て作文を書くことになった時です。数ある映像のなかで、僕は半藤一利さんの語りを選びました。半藤さんは東京で空襲を経験した方で、語られていた当時の年齢は十四歳。ちょうど今の僕と同じ年齢でした。

映像の中で半藤さんは、空襲のあと、焼け跡で亡くなった人の遺体を運ぶ手伝いをしたと静かに語っていました。十四歳の少年がそんな過酷な体験をしていたという事実は、僕にはとても信じられませんでした。自分がその場にたたされていたとしたら、何ができたのかと想像するだけで足がすくみました。

さらに印象に残ったのは、半藤さんが「自分は“絶対”という言葉は使わない」と話していたことです。“絶対”という言葉は物事を一つの考えに閉じこめてしまい、他の可能性を見えなくしてしまいます。半藤さんは、当時絶対勝利や絶対大丈夫と思っていたけれど、全部嘘だったと語っていました。僕はその姿に経験だけではなく、生き方としての力強さを感じました。

映像を見終わったあと、僕はただの昔の話として聞いていた戦争が急に自分のすぐそばにある現実のここのように思えて、しばらく動くことができませんでした。僕は学校に行き、友達と笑い、家で安心して眠る毎日を過ごしています。しかし、同じ年齢の半藤さんは、空襲の恐怖と向き合いながら、亡くなった人たちと向き合わざるを得ない日常を生きていたのです。

これまで僕は「日本ではもう戦争は起こらない」とどこかで思い込んでいました。でも、世界では今も紛争が続き、平和が壊れてしまう瞬間をニュースで何度も見えています。もしも日本でも同じようなことが起きてしまったら、と考えると胸がざわつき、言葉にできない恐ろしさを感じます。けれどその怖さから逃げてしまえば、過去の悲劇と同じ過ちを繰り返してしまうかもしれないとも思います。

だから僕は、半藤さんの言葉を思い出しながら、物事をひとつの考えに決めつけず、自分の頭で考えつづけたいと思います。そして、平和の尊さを学びながら、いつか自分の言葉で誰かに伝えられる人になりたいと思います。過去の出来事を自分の未来につなげるからこそ、今を生きる僕にできる小さな一歩だと信じています。

先人たちの声に耳を傾ける

光塩女子学院中等科 3年

新保 萌々子

私の住む高円寺では毎年8月、阿波踊りが開催される。国内外から人が集まるこのお祭りは私の誇りだ。しかし、その賑わいの裏にある戦争、歴史の影を私は知らなかった。

それを知るきっかけとなったのが、昭和館のオーラルヒストリーだ。空襲後、家に帰った時を回想した「駅に降り立ったら全てが焼け野原」「ぽっかり穴が空いていた」という小堀初枝さんの証言に、胸が締め付けられた。更に、困窮から学校を中退し働くことになり、「学生に会うのも嫌だった」という言葉から、戦争は命や建物だけでなく、日常や希望までも人々から奪ったものだと痛感した。

私の住む街は昔どんな姿だったのだろう。調べてみると、空襲被害を色で示す地図に出会った。一ここも空襲を受けていたの？そこには自分の家がある場所が真っ赤に染まっていた。さらに、近所の公園も、通っている学校さえも、空襲の被害があったようだ。改めて突きつけられた事実が胸が苦しくなった。終戦から80年経った今、戦争の惨禍の爪痕がほとんど見えないほど街は発展している。しかし、新しい建物、草木、そして今私が立っているこの地面も、戦争の時代を経て今に繋がっているのだ。そう頭では分かっている、どこか現実とは思えなかった。

更に調べを進めると、阿波踊りと戦争の関係が見えてきた。昭和20年、焼け野原となった高円寺。その後商店街の青年部が街の賑わいを求め、阿波踊りを立ち上げたという。そして、多くの人の「街を盛り上げたい」という願いは現代まで脈々と受け継がれている。オーラルヒストリーの証言にあった、戦後、子どもながら親と共に働き「復興に尽くした」という高野文太郎さんの言葉をふと思いだした。先人たちの復興に懸ける強い思いが、今の豊かな暮らしの土台を築いていたのだ。

街に出ると、多くの人々が賑わっていた。今日は阿波踊りが開催される日だ。街行く人たちの顔には笑顔が灯り、活気に溢れるこの景色も、以前とは違って見える。私は今まで、「戦争」というものをどこか、遠くの世界の出来事のように感じていた。しかし今回、自分の街の昔の姿から先人の復興に対する思いや心情を知り、感謝の気持ちでいっぱいになった。それと同時に、こんな悲惨な戦争は二度と繰り返されてはいけない、そして自分の街が再び焼け野原になる姿を見たくない、そう強く思った。これまで街を発展させてくれた先人たちからバトンを受け取った私たちにできること、それは、過去を学び続ける姿勢を持つことだ。戦争の爪痕が見えづらくなっている今、戦争は簡単に風化してしまいそうになる。その中で、オーラルヒストリーを通して、紙や写真だけでは知り得ない証言者の方の経験や心情を知る機会が重要だ。先人たちの思いを大切に、戦争がもたらしたものを未来に伝え続けていくことが私たちの使命なのではないかと感じた。